

「アガベ」(題字・伊藤博胤)

 日本社会事業大学
Japan College of Social Work

アガベ

日本社会事業大学同窓会北海道支部【(2019年2月2日発行 第24号)】

(事務局・仁木町大江2-457大江学園内 0135-32-3662)

【社会福祉随想リレー】

地域づくりは、人づくりから その3

白井 紀代美 (研究科84年卒、(福)札幌市社会福祉協議会)

(承前)

以下、具体的な事例を紹介します。

《事例》

定期訪問でヘルパーが訪問しました。不在なのか呼び鈴に反応がなく、電話にも出ないため、「室内で倒れているのではないかと」思い、カーテン越しに室内の様子を確認しました。けれども、詳細が判らなかつたため、次のような対応をしました。

- ① 近所に訊いてみると、2～3日前救急搬送されている。
- ② 区役所に連絡し生活保護のワーカーに確認するが、定時を過ぎていたため担当者は退勤してしまったとのこと。
- ③ 区役所では状況を説明しても個人情報であり、担当者不在のため「わからない」とのこと。
- ④ 消防署に連絡すると、「どこの病院に搬送したかは教えることはできない」、また自宅に戻っているかどうかはわからない。
- ⑤ 主治医に電話確認しても、個人情報のため教えてもらうこともできなかった。

これにより、担当ヘルパーは、「万が一、室内で倒れていたならば」、「手遅れになってしまったならば」と不安が募るばかり。ドアの鍵を壊して入るか、窓を割って入るか、と検討しました。やむなく、市内病院・診療所の知り合いのソーシャルワーカーに片っぱしから電話していきました。担当者会議、カンファレンス等で同席したことのあるソーシャルワーカーは、個人情報とはいえ必要性を理解してくれ、そこで入院中であることが確認でき、ようやくヘルパーは帰宅することができました。

以前、利用者宅の鍵を壊して入室し、倒れていた利用者を救助したことがありまし

た。しかし後日、「鍵の修理費の請求」が来ました。「鍵を壊して入ろう」と判断したヘルパー事業所が「鍵の修理代を弁償」するのだということです。

人の命と鍵の修理代を天秤にかけるつもりはありません。しかし、室内にいるかどうかとも判らない状態で、鍵や窓を壊すわけにもいかず、「個人情報」ということで情報を得ることもできません。入院時連携加算（入院したとき担当ケアマネが情報提供すると加算報酬を得られる）は、「個人情報」の取り扱いの改革につながるのかもしれませんが、専門職同士の情報共有については、早急な対策が必要だと思います。

4、これからのソーシャルワーク～地域づくりは人づくりから～

「互助」「共助」の推進、そのために必要な「地域包括ケア」と「地域づくり」について、これまでも多くの学者が論じています。けれども、その構成員一人ひとり、土台となる個人が本当に必要性を感じなければ、物事は前進しません。なんでも便利になりデジタル化している世の中は、自分中心主義。

そこで、「福祉の心」をどのように育てるか、が課題になります。

かつて、大家族の中でおじいちゃん、おばあちゃんの老い行く姿を見て、介護や看取りを体験しながら、知らぬ間に培われていた「命の尊さ」や「思いやりの心」を、今どのような形で学ぶのでしょうか。

近所のおじさんに叱られた経験もなく、家庭で経験することもなく、教育の場でもなく、人間関係が希薄になった結果、殺伐とした社会の中で、周囲には目を向ける余裕も持てなくなっているのかもしれない。人を思いやることのできる人間形成は、「福祉教育」という机上論では身につくものではないと思います。

様々な環境の中で形成される人の心。その「心」が豊かに育つように、私たち専門職は地道な地域活動から始めていかななくてはならないのでしょうか。

「誰もがその人らしく、望む生活ができる社会」であるための基盤づくり、構成する土台の個々が「暖かい地域が必要だ」と感じることができる「心の教育」、「福祉教育」を展開していくために今、地域に目を向け、私たちソーシャルワーカー一人ひとりが地元で、活動していかななくてはならないのではないだろうか、と思います。

札幌市ではコミュニティーソーシャルワーカー（CSW）が第一層として、各区社協に3年前から1人ずつ配属されています。しかし、たった1人の専門職で、区全体の把握はできませんから、一昨年からは地域包括支援センターエリアごとに第二層CSWがもう1人ずつ配属されました。

いずれにしても社会福祉理念や意識のない地域で、少数のリーダーでは変革するのは困難です。住民一人ひとりの意識を変容させる地道な活動を、社会福祉を学び、専門職として社会福祉実践している社大同窓生こそが、先頭に立って協力していきたいと考えています。

* この随想りレーは3回連載であり、その1は第22号、その2は第23号に掲載しました。ご愛読ありがとうございます。

恒例の2019年新春セミナーを開催

何事にも「平成最後」と冠が付く2019年の新春セミナーは、1月26日(土)に、札幌の「緋焔(ひえん)北1条店」において開催されました。

当日の参加者は、昨年4月にはるにれに就職した松川さんや久しぶりの参加の田野さんを始め、12人でした(2人が所用で急遽欠席となりました)。

新春セミナーでは冒頭、必ず学習の時間を設けています。今回は、道副会長の瀬戸さんが「これからの福祉・介護」と題して、レクチャーしてくれました。財政審と経済財政諮問会議の資料を使って、国の今後の社会福祉の方向性が中心でした。ただ美麗句は並べてはいるものの、少なくともどれもこれも国にとって都合の良い内容のものばかりであり、社会福祉の先行きに不安を感じてしまいました。

続いて、時間の問題から校歌斉唱は割愛し、定期総会に入りました。議長は高田さんが務め、金子事務局長が議事次第に従い、諸報告及び諸提案を行いました。また、就活フェアを含むこの間の道同窓会の活動の到達点等については、村上会長が補足説明を行いました。こののち、千葉監事が事業及び会計監査の報告をしました。

これらを受けて、参加者から多様なご意見をいただきました。この中では、「社大の動向が分からない」、「もっと『天下の社大』をめざして欲しい」などの意見と共に、「この間就活フェアなどで培ってきた横の繋がりを強化し、同窓会、教員組織、職員組織、学生の4者による諸活動の強化を図っていくべき」との意見も出され、6月の同窓会幹事会に道同窓会としての提言を提出することとしました。

なお、19年の秋季セミナー&市民公開セミナーについては、腹案はあるものの、当該ブロック幹事が止むを得ない理由で欠席していたため、会長預かりとし、再度協議をしていくことで諒承されました。

以上を含め、議案のすべてについては全員一致で承認されました。

議事を終え、まず村上会長が新年の挨拶をし、木村副会長の音頭で懇親会に突入しました。懇親会中にも、「総会の議論」は続き、また参加者全員の近況報告もありました。とりわけ諸先輩たちは、高校時代→社大時代→卒後の歩み→現況と、仲々ハードな自己紹介を繰り返し、改めて諸先輩たちの凄さを実感したのでした。

この日は飲み放題コースでした。そのせいもあって参加者の意気もドンドンと上がってはいったものの、さすがは札幌中心街。「コースのお時間終了です。次のお客様の予約も入っていますので…」と言われてしまい、土淵副会長の音頭で乾杯し、秋季セミナーでの再会を約して、参加者は三々五々、札幌の夜の街へと消えていったのでした。

* 今回の出欠葉書の回答は30人程度であり、道同窓会の求心力の低下が如実に観られます。各人にとっては様々な理由は考えられるものの、同窓会全体としては、ブロック幹事の出番です。道内会員の振り起こしが急務です。みなさまの強力なご協力をよろしくお願いいたします！